

<報告>

必修科目「音楽文化論」で共通使用するコンテンツの作成

Creating Audio-visual Teaching Materials for “Music Cultures” (Ongaku Bunkaron), a Compulsory Course at Kunitachi College of Music

早稲田 みな子 WASEDA Minako 横井 雅子 YOKOI Masako
川崎 瑞穂 KAWASAKI Mizuho

「音楽文化論」は、国立音楽大学の2年生全員が必修の「基礎科目」のひとつである。クラシック音楽以外の音楽文化を広く取り上げ、音楽文化全体の中での自らの立ち位置を学生に確認させるという趣旨のもと、2004年に設置された。1学年を5～6クラスに分けて複数の教員で担当し、具体的な内容は各教員が任意に定めてきた。しかし、全員必修科目として何らかの共通の学びがあるべきであるとの観点から、2021年度学長裁量経費の助成を受け、全クラスで使用できる共通教材の作成を開始した。同年度には教材のテーマを三味線、尺八、囃子、三線に定め、専門家による解説と演奏の収録を行なった。2022年度、再度助成を受け、テロップの付加を含む編集作業、および附属テキスト資料の作成を行なった。本稿では、本プロジェクト企画の背景、実施プロセス、および成果について報告する。

キーワード：教材、三味線、尺八、囃子、三線

1. 「音楽文化論」について

本稿は、2022年度「教育改革推進のための学長裁量経費」の支援を受けたプロジェクト「必修科目『音楽文化論』で共通使用するコンテンツの作成」の成果報告である。本プロジェクトは2021年度に同助成を受けて開始され、2022年度に継続プロジェクトとして再度助成を受け実施された。本プロジェクトの背景や趣旨については、『研究紀要』第57集にて、2021年度の報告の中で詳しく述べられているが（吉成 他 2022, 297-302）、本稿においても簡単にまとめておきたい。

「音楽文化論」は、2004年度のカリキュラム改革により「基礎科目」のひとつとして導入されたもので、本学2年生全員の必修科目である。近代的な音楽学校における教育では、国内外を問わず、西洋芸術音楽、いわゆる「クラシック」がその中心に据えられてきた。20世紀以降、マスメディアの発展とともにポピュラー音楽が世界的に大きな影響力を持つようになり、また多文化主義の台頭や、いわゆる「ワールドミュージック」⁽¹⁾ブームによって世界の諸民族の音楽が注目されるようになってからも、その状況はあまり変わっていない。本学では2004年のカリキュラム改革以前から、「ポピュラー音楽研究」や「民族音楽学」といった講義はあり、西洋古楽や伝統邦楽の演奏実習もあったが、それらはいずれも「選択科目」であった（吉成 他 2022, 298）。音楽大学の学生たちが大学の「中」で専門的に学ぶ音楽と、大学の「外」にあふれているその他諸々の音楽には大きな乖離が生じており、それは改善されるどころか、ますます拡大している。音楽大学の学生たちが卒業後、「音楽の専門家」として世の中で活躍しようとする時、その乖離は大きな障壁となってしまいかねない。「外」の音楽の多様化に適應するためには、クラシック音楽以外の幅広い音楽文化に関する知見と、それに基づく自分の立ち位置の認識が必須である。このような発想から設置されたのが、「音楽文化論」である。

本授業の目標と趣旨（以下シラバスより抜粋）は、開設当初からほとんど変化していないが、その意味するところは古びるどころか、ますます重要性を増していると思われる。

[授業目標]

日本を含む世界各地の伝統音楽からポピュラー音楽まで、様々な音楽に触れながら、現代の音楽文化の全体像を幅広い視野から理解することができる。またその中で自分の位置を認識することができる。

[授業の趣旨]

私たちは今、人類の歴史始まって以来の複雑で多様化した音楽文化の中にいる。遠く離れた地球の裏側の音楽でさえ簡単に聴くことができるし、最新のヒット曲から何百年も昔の古典まで、ありとあらゆる時代とジャンルの音楽を楽しむことができる。これほどまでに多様化した音楽文化の中で音楽の専門家として生きていくためには、豊富な知識や経験が必須である。

一方、音楽大学の中で専門的に扱う音楽の範囲は、非常に限定的である。百数十年前、近代的な音楽学校が各地に生まれた頃の音楽文化を、今なお教育の基礎として守り続けている。その間に学校の外の音楽文化は著しく多様化し、結果として学校内外の音楽文化はどんどんかけ離れていった。

現実世界の幅広く多様な音楽文化と、音大の中の狭い音楽文化の間を橋渡しするために置かれるのが、「音楽文化論A B」である。

2. 「共通教材」の作成

「音楽文化論」は、「音楽概論」「西洋音楽史概説」とともに、基礎課程の必修科目として位置づけられており、金曜日の3限に2クラス、4限に3クラスを開講し、同じ日に2年生全員が受講できるようになっている。「音楽概論」と「西洋音楽史概説」については、当初から共通教材が作成され、各担当教員が基本的に同じ内容をカバーできるようになっている。一方、「音楽文化論」は、その守備範囲の広さや担当教員の関心領域の違いにより、内容を一元化することが困難であった(吉成 他 2022, 299)。そのため、具体的な授業内容や進め方は、各担当教員に委ねられることとなった。しかし、「音楽基礎教養」として「全員の必修科目」に位置づけられている以上、何らかの共通の学びがあるべきであるという観点から、「共通教材」の必要性が認識されるようになった。そこで立ち上がったのが、本プロジェクトであった。

「共通教材」として企画したのは、伝統邦楽の先生方による解説と実演を収録した視聴覚教材、およびその附属資料である。具体的には、尺八、三味線、囃子、三線を採り上げた。収録内容や手順については、ある程度事前に各先生と打ち合わせをし、それを踏まえて先生方が作ってくださった進行台本に従って収録を行なった。収録の概要については、昨年度の成果報告(吉成 他 2022, 301)から抜粋し、テイク数と総録画時間を加筆したものを以下に示す。

1) 尺八

ゲスト講師：山口賢治

収録日：2021年4月17日(午前)

収録内容：尺八の歴史的背景の説明、様々な演奏技法、及び古典本曲と現代曲の実演、尺八の素材、構造、制作過程の紹介、楽譜の仕組みの解説、各種尺八の比較。

(11テイク、78分45秒)

2) 三味線

ゲスト講師：今藤龍十郎(長唄)、清元延美雪(清元)、鶴澤津賀花(義太夫)、富山清仁(地歌)

収録日：2021年4月17日(午後)

収録内容：本学非常勤講師の長唄演奏家、今藤長龍郎氏のご紹介により、長唄、清元、義太夫節、地歌という異なる三味線ジャンルの演奏家にお集まりいただき、ジャンルごとの特徴を比較した。収録内容は、演奏前の楽器の準備、歴史的背景の説明、奏法と音色の特徴の説明と実演、代表的な演目の実演。

(65テイク、80分24秒)

3) 囃子

ゲスト講師：福原寛（笛）、堅田昌宏、望月佐太助、堅田崇（以上三名、打楽器）

収録日：2021年5月1日（午前）

収録内容：歌舞伎と囃子の歴史的背景の説明、四拍子の各楽器（笛、大鼓、小鼓、太鼓）の素材、扱い、特徴の説明と実演、楽譜と唱歌の説明、陰囃子の様々な楽器の実演、民俗芸能における囃子の紹介。

(23テイク、56分00秒)

4) 三線

ゲスト講師：大里均

司会進行：澤田聖也（音楽学専修卒業生、東京藝術大学大学院在籍、大里氏の弟子）

収録日：2021年5月11日（午後）

収録内容：沖縄民謡と琉球古典音楽の実演、三線の歴史的、社会的背景、生活の中での役割、歌三線等についての説明、楽譜の解説、楽器の構造や調弦について実演を含めた解説、流派の説明、新曲や歌の種類についての解説と実演、歌と踊りの関係、奄美と沖縄本島の三線の違いについての説明。なお、説明的な部分は司会との対話形式でお話いただいた。

(16テイク、67分58秒)

収録動画の編集にあたっては、必要部分を抜粋するだけでなく、必要に応じて楽器細部の拡大写真、イラスト、楽譜等の画像データを挿入した。また、口頭で聞いただけではわかりにくい用語やその意味、演奏曲のタイトルや解説、演奏者情報等をテロップで補った（図1参照）。



図1 三線の共通教材より

編集作業は、動画の撮影者である専門家に2021年度中に委託したが、収録後半年以上が過ぎた時点で、受注がキャンセルされるという予想外のできごとがあり、年度内に編集を終えることができなかった。幸い2022年度にも学長裁量経費の支援をいただけることになったため、別の業者に新たに編集を委託した。

撮影に立ち会っていない編集者に、編集内容の詳細を伝えるため、録画の抜粋箇所、挿入動画、テロップ等の情報を、収録動画ごとにエクセル表にまとめることにし、囃子と三線を川崎が、三味線を横井が、尺八を早稲田が担当した。このデータに基づき編集した動画が、2022年9月末から10月末にかけて、順次、編集委託者から送られてきた。本プロジェクトメンバーの全員で、この第1版の動画を全て視聴し、エクセル表で示した内容通りに編集が行われているか、動画の繋ぎ方、テロップの大きさ・位置・内容、音量等に問題がないかなどを念入りに確認した。その結果明らかになった問題点を一覧で示し、編集業者に第1回の修正作業を委託した。2023年度4月中旬に、修正作業を終えた動画（第2版）が送られてきた。これを再度プロジェクトメンバー全員で確認したうえで、2023年度前期の「音楽文化論」の授業で試作版として使用した（日程等の詳細は事項参照）。大教室の大型スクリーンとスピーカーで視聴することで、新たに細かい問題が見つかるとともに、授業後に行なったアンケートにより、学生の反応を確認することができた（結果については事項参照）。さらなる修正事項をリストアップして編集者に送り、再修正版（第3版）が9月初旬に完成した。完成動画の再生時間は以下の通りである（尺八のみ二編に分かれている）。

囃子：43分17秒
 三線：43分32秒
 三味線：49分55秒
 尺八1：32分51秒
 尺八2：34分53秒

その後、動画教材の理解を助けるために、主にテロップの情報を文字化した附属資料、「音楽文化論 動画共通教材テキスト」も作成した（図2～4参照）。これについても、囃子と三線を川崎が、三味線を横井が、尺八を早稲田が担当した。



図2 「音楽文化論 動画共通教材テキスト」表紙

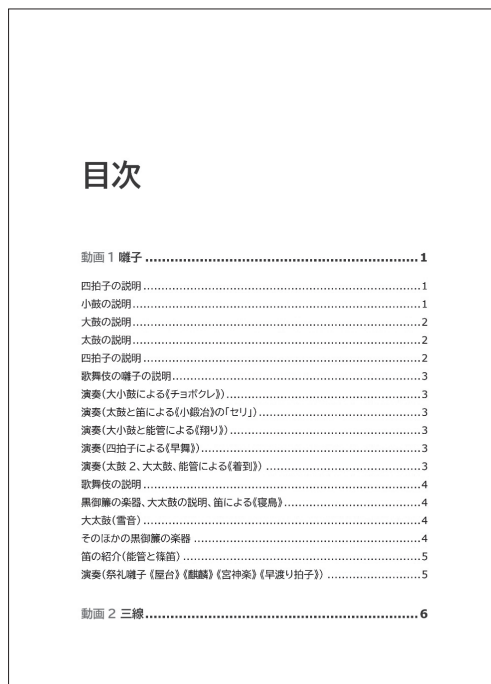


図3 「音楽文化論 動画共通教材テキスト」目次サンプル



図4 「音楽文化論 動画共通教材テキスト」本文サンプル

3. 「共通教材」の成果

2023年度前期の「音楽文化論」にて、動画共通教材の試作版(2023年4月完成の第2版)を各担当者(川崎、前島美保、早稲田)が実際に使用し、アンケートをとった。使用教材、実施日、担当教員は以下の通りである。

囃子: 7月7日(川崎2クラス、前島2クラス)

三線: 6月9日(前島2クラス)、6月16日(川崎2クラス)

三味線: 6月9日(川崎2クラス)、6月16日(前島2クラス)、6月30日(早稲田1クラス)

尺八: 6月30日(川崎2クラス)、7月14日(早稲田1クラス)

上記の計16回の授業のうち、6月9日の前島担当の2回分は授業感想文を集め、その他の14回ではアンケート調査を行なった⁽²⁾。アンケートにはGoogle Formsを用い、難易度、満足度、長さについては選択式で、感想、改善点については記述式で質問した。集計結果を、項目ごとに見ていく。

【難易度】

「普通」65~89%

「簡単」2~18%

「難しい」6～23%

各クラスにおける「簡単」と「普通」の合計：78～95%

「難しい」という評価が最高値の23%に達したのは、三味線の動画であった。三味線の動画では、長唄、清元、義太夫、地歌という複数ジャンルを扱ったため、もともと三味線に馴染みが薄い学生たちにとっては初めての情報が多く、消化不良になってしまったのかもしれない。全体としては、各クラスとも「簡単」または「普通」と答えた学生の合計は78～95%であり、適切な難易度であったといえよう。

【満足度】

「面白かった」36～68%

「普通」31～54%

「つまらなかった」0～6%

各クラスにおける「面白かった」と「普通」の合計：94%～100%

「面白かった」という評価が最高値の68%に達したのは、囃子の動画であった。また、「つまらなかった」が0%をマークしたのも、囃子の動画であった。全体として、「面白かった」あるいは「普通」と答えたが学生の合計は、全てのクラスにおいて94%以上であり、多くの学生にとって興味深い内容であったと考えられる。

【長さ】

「長かった」7～46%

「普通」50～93%

「短かった」0～4%

「長かった」が最高値の46%に達したのは、三味線の動画であった。しかし、別のクラスの三味線のアンケートでは、「長かった」が29%と30%であり、ばらつきが見られた。「長かった」は、尺八の2クラスでは24%と33%、三線（1クラスのみ実施）では27%であった。一方、「長かった」が最低値の7%をマークしたのは、囃子の動画であった。別のクラスの囃子のアンケートでは「長かった」が19%と21%であった。このように、クラスによってばらつきはあるものの、囃子は比較的「長かった」と感じる学生が少なく、その他の動画は、平均的に30%前後の学生が「長かった」と感じたことがわかった。途中で動画を停止して解説を補足したり、学生に質問を投げかけたりなど、見せ方を工夫すると良いかもしれない。

感想は肯定的なものが多かった。主なものを以下に要約する。

- ・手元のアップが見られてわかりやすかった
- ・言葉だけでは伝わりにくい部分も実演で確認できた
- ・説明が丁寧で詳しく、わかりやすい
- ・たくさん楽器を見ることができ、それぞれの音も確認できてよかった
- ・鼓は楽器の組み立て方が面白かった
- ・三味線のジャンルによる違いが演奏と説明でよくわかった
- ・三味線の駒は楽器にくっついているのではなく設置すると知って驚いた
- ・これまで知らなかったことをたくさん学べた

- 字幕があるのが良かった

手元のアップなどは、録画教材ならではの利点といえる。また各分野の専門家だからこそできるわかりやすく詳細な説明と実演は、期待通り好評であった。鼓や太鼓の組み立てや三味線の駒の設置などの実演も、学生にとって新鮮な学びとなったようだ。もちろん生で見たり体験したりするに越したことはないが、録画教材だからこそ多くの学生に平等に学びの機会を提供することができる。毎年2年生全員が履修する「音楽文化論」では、こうした貴重な録画教材の利用価値は非常に高い。

改善点として挙げられていたもので最も多かったのは、以下の三点である。

- テロップの字が小さい
- テロップの表示時間が短い
- 解説が早すぎてついていけない

このアンケートをとった時点では、附属資料のテキストが完成しておらず、学生に配布することができなかつた。上記の問題点は、その後作成したテキスト資料（前述の「音楽文化論 共通動画教材テキスト」）を授業で配布することで、ほぼ解決できると思われる。今後はテキスト資料をあわせて使うことで、動画教材の教育効果をいっそう高めていく予定である。

謝辞

このプロジェクトは2021年度、および2022年度の国立音楽大学教育改革推進のための学長裁量経費の助成を受けて実施されました。

註

- (1)「ワールドミュージック」は、1980年代のはじめにロンドンのレコード会社の経営者たちの会合で採択された商標で、諸民族の伝統音楽の要素を取り込んで作った異種混濁的なポップスを売り出すために使われた（柘植 1991, 23）。1980年代後半から1990年代前半には「ワールドミュージック」は世界的なブームとなった（塚田 1999, 6）。
- (2) 3限、4限の2クラスを担当している川崎、前島は2回分の授業で1つのアンケートフォームを用いた。7月7日の川崎担当クラスのみ、3限、4限で別のフォームを用いたため、アンケートフォーム数は合計9つである。

参考資料

- 塚田健一 1999 「世界音楽と変容する伝統」『はじめての世界音楽』柘植元一、塚田健一（編者）、5-17 音楽之友社
- 柘植元一 1991 『世界音楽への招待』音楽之友社
- 吉成順、横井雅子、早稲田みな子 2022 「必修科目『音楽文化論』で共通使用するコンテンツの作成（報告）」『研究紀要』（国立音楽大学）第57集：297-302